View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by TEIKYO University of Science Academic Repository

2017年度・2018年度　教育人間科学部海外語学研修報告

Language Training and Homestay Program of Faculty of Education & Human Sciences in 2017 and 2018

馬場千秋（帝京科学大学）
Chiaki BABA（Teikyo University of Science）

要約：　本稿では，2017年度から開始した教育人間科学部の海外語学研修について報告する．海外語学研修の企画は，2016年度に学校教育学科発案で始まったが，参加希望者が少なく，2016年度は実施することができなかった．その要因を探り，仕切り直しを行い，複数の旅行取扱企業からの企画書比較をした上で1社に絞り，2017年度より海外語学研修を実施するに至った．2017年度には15名，2018年度には13名が参加し，研修先であるオーストラリアのサザンクロス大学リズモアキャンパスにて研修を行った．また，地元の学校訪問などを通じて，日本の学校との相違点を学生は感じ取ることができた．今後の課題として費用，語学研修参加による単位認定，現地でのプログラム，ホームステイ先の選定，到達度確認などが挙げられる．

Ⅰ．はじめに

現行（平成20年版）の学習指導要領より，小学校５，６年生に「外国語活動」が必修で導入され，新（平成29年版）学習指導要領では，「外国語活動」が小学校３，４年生に引き下げられ，小学校５，６年生に「外国語」が必修の教科として導入されることとなった．2018（平成30）年度からは，移行措置として，小学校３年生より実質上，「外国語活動」が始まっている．このような流れもあり，寺沢（2016）の調査では，小学校英語に対し，小学生の保護者の35.2％が賛成，41.2％がどちらかといえば賛成と回答している．ベネッセ教育総合研究所（2006）の調査で，小学生の保護者の47.8％は小学校１年生から英語の授業が始まることを望んでいる．また，小学生の13.5％は習い事として英語塾に通っており（太田，2015），小学校に入学する以前から英語塾に通っていることも多い．幼稚園や保育園の中にも，英語を取り入れているところが少なからず存在する．さらに2020（令和２）年には東京オリンピックが開催されるため，日本全体での英語熱は高まるばかりである．

中学校，高等学校の現場においても，英語教育が変わりつつある．現行（平成21年版）版高等学校学習指導要領第２章第８節「外国語」第３款４において，「英語に関する各科目については，その特質にかんがみ，生徒が英語に触れる機会を充実するとともに，授業を実際のコミュニケーションの場面とするため，授業は英語で行うことを基本とする．その際，生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮するものとする．」という方針が打ち出され，その後，中学校学習指導要領においても「英語の授業は英語で行う」という方針となった．

さらに，学校現場全体を見てみると，外国人児童生徒が増加しており，日本国内の小・中・高等学校・義務教育学校・中等教育学校・特別支援学校の全体において，日本語指導が必要な外国籍の児童生徒数は，2016（平成28）年度には34,335名，学校数は7,020校となっている．このような状況下で児童生徒本人および保護者とのコミュニケーションツールとして，国際共通語である英語が必要であり，英語担当以外でも，日常会話ができる教員が必要である．

上述のような状況を踏まえ，教育人間科学部では，「国際共通語としての英語」を身につけている学生を育成すること，および2019年度に開設した学校教育学科国際英語コースにおいて，「英語の授業を英語で行う」ことができる教員を養成することを主眼に置き，その一環として，海外での語学研修の機会を設けることとし，2017年度より研修を開始した．

本稿では，2017年度より教育人間科学部で開始した海外語学研修の実施に至るまでの経緯および2017年度，2018年度に実施した研修の内容，学生の様子などを報告する．

Ⅱ．海外語学研修実施の目的

教育人間科学部における海外語学研修実施の目的は，次の３点である．

(1) 英語を使ったコミュニケーション能力の向上を図る．
(2) 英語圏での生活を通じ，異文化体験をすると同時に，日本の文化を振り返る機会を設ける．
(3) 他国の小学校，中学校の教育事情を学ぶ．

これらの目的を果たすため，海外語学研修の企画を行うこととし，プログラム立案を行った．

Ⅲ．海外語学研修実施までの経緯

１．2016年度の取り組み

2016年７月に，学校教育学科の学科長と所属教員より，海外語学研修の提案があり，企画をした語学学校を運営しているＡ社との打ち合わせを行った．そのときにＡ社から提案があった内容は次のとおりである．

・春休み中（３月）に２週間実施する．
・アメリカ　フロリダ州でのホームステイで，原則１家庭につき２名である．
・Ａ社と提携している語学センターでの語学研修を行う．
・最少催行人数は10名で，定員を20名とする．
・教員は引率しない．
・費用は燃油サーチャージおよび空港諸税を含み，約500,000円である．
・支払い方法は一括払いのみである．
・参加者は３か月間の語学講座を安価で受講できる．

この形で学科，大学の了承を得て，急遽，応募を開始することとなった．説明会には91名中49名が参加した．アンケート調査を実施したところ，49名中３名が「参加する」，23名が「検討する」，23名が「参加しない」という回答であった．不参加と回答した23名中20名が「費用が高い」ため，参加しないという回答であった．費用以外の要因としては，(1) 学校教育学科のみに声をかけていたこと，(2) １期生が入学したばかりで，全体でも100名弱であったこと，(3) 高価な参加費に対し，支払い方法も一括払いのみであったことが考えられる．結果として，実際の申し込みは２名にとどまったため，2016年度は事前研修である語学講座のみを開講した．３か月間，Ａ社の運営する語学学校のアメリカ人講師により，旅行やホームステイでの英会話を学内で実施したが，参加者も５名のみであった．

２．2017年度に向けての仕切り直し

2016年度の反省を踏まえつつ，2017年度の海外語学研修実施に向けて，仕切り直しをする必要があった．そこで，複数の旅行取扱企業に企画書の提出と企画内容についてのプレゼンテーションを実施してもらい，依頼する企業を決定することとした．企画を依頼する際，次の条件を提示した．

・春休み中（２月～３月）に約２週間の語学研修を行う．
・ホームステイで，できれば１家庭１名が望ましい．難しいようであれば，１家庭２名でもよい．
・教員は引率するが，引率費用は学生から徴収する費用には含めない
・費用は400,000円以内とする．
・支払い方法は，一括払いだけでなく，分割払い，カード払い等，複数の方法がある．

期日までに企画書を提出したのは４社である．そのうち１社はプレゼンテーションに参加できなかったため，企画書のみでの参加となった．また，１社が企画書の提出はないが，プレゼンテーションへの参加表明をしたため，プレゼンテーション当日は，企画書を提出したうちの３社と企画書なしの１社のプレゼンテーションとなった．

プレゼンテーションには，教員４名（筆者を含む），職員１名が立ち会った．この段階で２社に絞った上で，学校教育学科の学科会議にて審議を行い，2017年２月に，最終的に近畿日本ツーリスト株式会社（現株式会社近畿日本ツーリスト首都圏）首都圏国際交流センター（以下，近畿日本ツーリスト）に依頼することとした．依頼をすることとなったポイントは，(1) 研修先は，英語圏の大学の語学センターでの外国人向けの英語研修である，(2) 研修地の治安が良い，(3) 費用面，支払い方法もこちらの条件に合致している，(4) 企画そのものが綿密に組まれている，(5) 歴史のある旅行会社であり，語学研修企画にも慣れており，安心できる，という５点であった．

Ⅳ．海外語学研修実施報告

１．2017年度

ａ．旅程

2017年度は，表１の旅程で実施した．

表１　2017年度旅程

日程	午前	午後
2/25(日)		成田空港集合 20：25　JQ12便にて出発
2/26(月)	6：25　ゴールドコースト着後，サザンクロス大学（以下，SCU）リズモアキャンパスに移動.	オリエンテーション，英語プレイスメントテスト後，ホストファミリーと対面，ステイ先へ
2/27(火)	英語研修（自己紹介等）	SCU内コアラホスピタル見学
2/28(水)	The Macadamia Castle and Animal Park見学	Summerland House Farm見学
3/1（木）	英語研修（オーストラリアの農業について）	英語研修（現地学生との英会話での交流）
3/2（金）	英語研修（ライティング）	英語研修（英会話練習）
3/3（土）	ホストファミリーと各自が過ごす	
3/4（日）		
3/5（月）	英語研修（週末について）	英語研修（現地学生との英会話での交流・地元高校訪問準備）
3/6（火）	地元高校訪問（Physical Education, Agricultureの授業参加）	Lismore市内の博物館見学（アボリジニーについての学習）
3/7（水）	英語研修（高校訪問とアボリジニーについて）	英語研修（オーストラリアの動物について）
3/8（木）	英語研修（オーストラリアの文化について）	英語研修（現地学生との英会話での交流）
3/9（金）	英語研修（Thank you letterの書き方）	日本とオーストラリアの関係についての歴史学習修了式
3/10(土)	ゴールドコースト滞在	
3/11(日)	10：30　JQ011便にてゴールドコースト発	18：30　成田空港着

日程：2018年２月25日（日）より2018年３月11日（日）15日間

場所：オーストラリア　ニューサウスウェールズ州リズモア地区サザンクロス大学リズモアキャンパス

費用：398,000円

b．渡航前

近畿日本ツーリストの協力のもと，４月より広報を開始し，５月に参加希望者向けの説明会を行い，その後，申し込みを開始したところ，19名の参加希望者があった．最終的に９月末に参加の意思確認をしたところ，16名が参加表明をした．その後，10月には参加者向けの説明会において，ホームステイ先を決定するアプリケーションやパスポートコピー，海外旅行保険等の手続きについての説明を行った．

2017年11月には教務学生委員会の承認を受け，2017年12月には海外語学研修安全の手引きと安全対策指針を学校教育学科の学科会議および教務学生委員会に提出をし，承認を受けた．

2018年２月初旬に参加者向けの最終説明会を実施し，渡航を待つ段階で，体調不良により１名のキャンセルがあり，最終的な参加者は15名となった．内訳は，学校教育学科小学校コース１年生３名，２年生５名，同中高理科コース１年生２名，２年生１名，児童教育学科３年生３名，こども学科４年生１名であった．

c．渡航後の研修

2018年２月26日（月）にSCU到着後，参加学生は英語プレイスメントテストとして，与えられたタイトルについて英文を書くという課題をこなした．その後，SCUにあるSCU College（語学センター）での語学研修が本格的に始まった．SCU Collegeは，第二言語としての英語の授業を行っており，長期休暇中の他国の学生の数週間の英語研修および長期留学前の準備としての英語学習を請け負っている．

研修中は，本学からの参加者15名，千葉商科大学，長崎大学，福井工業大学の学生が到着直後の英語プレイスメントテストの結果によって３つのクラスに分けられ，語学研修を行った．本学学生は上位クラス２名，中位クラス３名，残りの10名が基礎クラスでの受講となった．複数の大学の学生と接し，親交を深めながら英語学習をすることができた．

図１　SCUキャンパス内での2017年度参加者

ｄ．研修のよかった点

表１にあるように，SCUのプログラムでは，英語研修以外にも様々な体験をすることができる．大学併設のコアラホスピタル見学を行うことができた．この施設では，コアラの保護をするために学内に設置されており，希少動物であるコアラをどのように保護しているのか，ホスピタルでの活動について英語で学ぶ機会を得ることができ，学生たちも希少動物を大切にすべきであるという考えを得た．The Macadamia Castle and Animal Farmでもオーストラリア特有の動物であるコアラやカンガルー，ワラビーなどに実際に触れ，生態などについて英語で学ぶ機会を得た．さらに，Summerland House Farmという障がい者の方々が働く施設を見学し，障がい者の方へのオーストラリアでの対応を知ることで，学生たちは障がい者に対してどのように接するべきなのか，考えるきっかけとなった．

また，地元のhigh school訪問をし，Physical Educationの授業に参加し，高校生とボールゲームを行った．日本では見かけないゲームであったが，学生たちは現地高校生の姿を見ながらルールを体得していた．このようなことも文化体験の一つと言える．さらに，high schoolの先生が，学生たちにAgricultureの特別授業をしていただき，ミツバチの飼育について，英語でレクチャーを受ける機会を得た．ICTを活用し，学生たちにはiPadがグループに１台ずつ配布され，質問に回答していくという授業形態であった．学生たちからは「面白かった」「あのような形態の授業をしてみたい」という感想が聞かれた．今後，教員になる上で参考になる方法であったと思われる．

また，オーストラリアのアボリジニーの文化学習については，アボリジニーという原住民のことは利いて知っていたが，詳細を知ることができてよかったという感想を得ている．

SCUリズモアキャンパス最終日には，日本とオーストラリアの関係について，DVDを観ながら，歴史的背景や戦争のことなどを学ぶ機会を得た．日本が第二次世界大戦中にオーストラリアを攻撃したという，日本の中高での歴史授業では扱われない内容であったため，学生たちは新たに知る事実に驚きを隠せない状況であった．しかし，リズモアでの最終日であったことから，学生たちからは「到着後，すぐにこのDVDを観る機会があればよかった」「もっと早く観ていれば，日本とオーストラリアの関係を考えながらステイできた」という感想を得ている．

ホームステイにおいては，水を大切にする文化のオーストラリアで，洗濯は週１回，シャワーも５分以内など，家庭によってルールを設けられている場合もあったが，柔軟に対応し，日本との違いを実感した学生が大半を占めた．また，日本の料理（親子丼など）をホストファミリーに作ってあげるなど，日本の文化を伝えようと頑張っている学生も複数見られた．

英語でのコミュニケーションについては，多くの学生が１家庭２名だったので，力を合わせながら，ホストファミリーとコミュニケーションを図っていたので，２週間で，全体として，スピーキング力とリスニング力は向上した．

ｅ．問題点

よかった点だけでなく，問題点も５つほどあった．

１つ目は，英語力に自信がない中で，中位クラスに入った学生が，講師から「こんなこともわからないの？」など，見下されるような言動を投げかけられたことがあった．本件は，SCU Collegeに申し入れをしたところ，講師の性格や教歴，バックグラウンドも関係することが分かった．申し入れの結果，2018年度はこのようなことは起こらずに済んでいる．

２つ目は，ステイ先が合わなかった場合である．ステイ先は，SCU Collegeが契約している会社が割り当てることになっているので，基本的には学生が提出したアプリケーションを見て判断される．

今回，基本的として１家庭２名であったが，１家庭１名という学生が存在した．男子学生であっ

たが，ホストマザーが60代の女性で，一人暮らしということもあり，何を話したらよいのかわからない，ということから，初日の段階で日本にいる保護者や友人に電話をかけてしまい，翌日の朝も「どうしたらいいかわからない」という状況であった．ホストマザーは何度も日本からの学生を受け入れていた方であったが，相性もあり，SCU College担当者と相談した結果，ステイ先の変更を行った．本学学生と一緒でなくては嫌である，という希望から，最終的には，２名を既に受け入れている家庭で，エクストラベッドを入れる形で３名を受け入れていただくこととなった．ステイ先の家族構成と学生の性別もステイ先配置の際の検討事項となる．

３つ目は，ステイ先の環境である．日本で暮らしているとどうしても清潔な環境を求めてしまう．女子学生の事例であるが，ステイ先で靴下を履いていて，そのままお菓子を踏んでしまい，その後，女子学生の部屋に蟻が大量に発生するという事案があった．２週目に入ったころから毎日のように「早く帰りたい」と言っていた．時にはLINEでも蟻が発生している様子を写真で送ってきていたので，励ましながら後半の１週間を過ごすこととなった．学生のほうもホストファミリーに蟻のことをあまり伝えていなかったようである．日本では家の中では靴を脱ぎ，戸締りもしっかりするが，ステイをした現地では，土足で家の中に入り，ドアも窓も開いていることが多いので，部屋の中に蟻が大量発生ということも起こりうる．環境の違いから起こったことであるが，学生にとっては未経験なことも多々あるので，何かあれば，引率教員がサポートする必要があると感じた事例である．

３つ目は，飲酒についてである．日本では20歳以上であるが，オーストラリアでは19歳から飲酒が可能となる．事前に「日本の法律を守ること」を伝えていたので，未成年が飲酒をすることはなかったが，20歳以上で飲酒をした学生のマナーの指導を渡航前にすべきであった．ステイ先によっては，毎晩のように飲酒をしている家庭もあったようだが，リズモアでの最終日に羽目を外して，醜態をさらしてしまった男子学生が１名おり，ステイ先ではcrazy boyと言われたとの報告を受けている．自分の限界を考えずに飲酒をし，体調が悪くなるなど，人に迷惑をかけるような飲み方をしてはいけないということを事前に指導すべきだったと反省した一件であった．

５つ目は，ホテルでのマナーである．帰国前日にゴールドコーストのホテルに宿泊したが，参加者全員が１つの部屋に集まり，話し込んでいたのだが，騒いでしまい，廊下まで声が聞こえるような状況であった．そのため，引率をした筆者も２度ほど学生が集まる部屋に行き，騒がないよう注意をする場面があった．他の宿泊客やホテルからのクレームが来る前に対応することができたが，マナーを守ってこその研修であるので，ホテル宿泊については，次年度の検討事項となったが，料金等も考慮し，ホテル宿泊がない旅程とした．

２．2018年度

ａ．旅程

2018年度も近畿日本ツーリストに依頼し，表２の旅程で研修を行った．

日程：2019年２月７日（木）より2019年２月21日（木）15日間

場所：オーストラリア　ニューサウスウェールズ州リズモア地区サザンクロス大学リズモアキャンパス

費用：394,000円

ｂ．渡航前

４月より広報を開始し，５月に参加希望者向けの説明会を行い，申し込みを開始したところ，13名の参加希望者があった．最終的に９月末に参加の意思確認をしたところ，14名が参加表明をした．2017年度と同様に，10月に参加者向けの説明会でホームステイ先を決定するアプリケーションやパスポートコピー，海外旅行保険等の手続きについての説明を行った．

2018年11月には教務学生委員会の承認を受け，2019年１月に参加者向けの最終説明会を実施した．渡航当日になり，インフルエンザにより１名のキャンセルがあったため，最終的な参加者は13名となった．内訳は，学校教育学科小学校コース１年生３名，２年生２名，同中高理科コース１年生１名，２年生２名，幼児保育学科１年生４名，こども学科１年生１名であった．

ｃ．渡航後の研修

2019年２月８日（金）に，SCU到着後，参加学生はオリエンテーションおよび昨年同様のライティングでの英語プレイスメントテストを行った．この日は本学学生のみのクラスでの研修，週明けより中国天津市にあるTianjin University of Sportsの学生との混合クラスとなり，英語力に

表２　2018年度旅程

日程	午前	午後
2/7（木）		成田空港集合 20：25　JQ12便にて出発
2/8（金）	６：25　ゴールドコースト着後，サザンクロス大学（以下，SCU）リズモアキャンパスに移動.	オリエンテーション，英語プレイスメントテスト，SCU内コアラホスピタル見学後，ホストファミリーと対面，ステイ先へ
2/9（土）	ホストファミリーと各自が過ごす	
2/10（日）		
2/11（月）	英語研修（週末について）	英語研修（現地学生との英会話での交流）
2/12（火）	英語研修（語彙学習とDVDによるオーストラリアの文化）	英語研修（オーストラリアの農業）
2/13（水）	The Macadamia Castle and Animal Park見学	Summerland House Farm見学
2/14（木）	英語研修（オーストラリアの農業についての復習，自分自身について）	英語研修（現地学生との英会話での交流）
2/15（金）	英語研修（アボリジニーについて）	英語研修（小学校訪問準備）
2/16（土）	ゴールドコースト滞在	
2/17（日）	ホストファミリーと各自が過ごす 一部学生はリズモアのダウンタウン見学	
2/18（月）	地元小学校訪問および日本の文化を教える授業実施	Rocky Creek Dam訪問
2/19（火）	英語実力テスト リーディング，リスニング，ライティングおよびクラスメートの前でのプレゼンテーション	英語研修（オーストラリアの動物について）
2/20（水）	英語研修（Thank you letterの書き方）	英語研修（復習）および修了式
2/21（木）	10：30　JQ011便にてゴールドコースト発	18：30　成田空港着

よって２つのクラスに分けられた．上位クラス７名と基礎クラス６名であり，各クラスに中国からの学生が10名ずつ加わった．2017年度は日本の大学の学生との混合クラスであったため，わからないことがあれば，日本語での会話で対応できたが，2018年度は中国人の学生とのコミュニケーションであったため，どのような場面でも英語を使う環境にあった．また，数名の学生はステイ先も中国人学生と同じ家庭であったので，英語母語話者とだけでなく，英語非母語話者同士でのコミュニケーションを図る機会を得ることができた．中国人学生の中には，大学院生も数名含まれていたことから，はじめは「中国人学生みたいに話せない」と気後れする学生もいたが，英語非母語話者同士ゆえに，「お互いに間違えてもいい」という積極的な気持ちでコミュニケーションをするべきであることを伝えると，交流をしていく中で，少しずつ自信をつけていった学生も多いと言える．

図２　2018年度の小学校での折り紙のレクチャー後

d．研修のよかった点

2017年度に引き続き，学内併設のコアラホスピタル，The Macadamia Castle and Animal Farm, Summerland House Farmを訪れ，オーストラリアの自然，希少動物保護，障がい者への対応などを学ぶことができた．さらに，2018年度は地元

の小学校を訪問し，日本の文化を伝える機会を得た．幼児保育学科とこども学科の学生学生５名は小学校に併設されている幼稚園にて，子どもたちの自由時間を一緒に過ごすという体験を行った．特に幼稚園の先生方から指示はなかったとのことで，子どもたちと自由に遊ぶ時間を過ごしていたが，どのように子どもたちと接していけばよいかを考えながら，行動していたという感想を得ている．学校教育学科の学生８名はそれぞれ４人ずつに分かれ，１つのグループはAlphabet huntingゲーム（日本語では「猛獣狩り」と呼んでいる）を中学年の子どもたちに教え，もう１つのグループは，低学年の子どもたちに折り紙で鶴の折り方を英語で教えた．Alphabet huntingゲームを教えたグループが早く終了してしまったので，折り紙のグループに合流した．折り紙の場合，折り方がわからない子どものそばに行って，個別に対応する必要があったので，学生の人数が増えたことで，折り方を教えるにも，一人一人に目が届く結果となった．

折り紙を教えたのは，低学年であったが，日本の小学校のように机と椅子がきちんと並んでいるような教室ではなく，時には机を使い，時には床に座って話を聞く，という形であったので，学生たちも日本との違いを感じ取っていた．学生たちからは，「英語で説明するのが難しかった」「一人一人に目をかけていく必要があって，大変だったけど勉強になった」「日本の小学校とは違って，床に座って授業を受けていた」など，発見したことや感じたことについてのコメントがあった．

日本でも態度の評価をすることになっているが，訪問した小学校でも態度の評価を行っていた．PCを使って即座に入力し，それが児童にも見えるようになっていることも特徴の１つであった．活動中の態度や発言，様々な事柄を見ながら，スクリーンに児童たち全員のアイコンを出しておき，そこをクリックして点数を入れていく方法であった．学生たちは小学校の先生がその場でPCを使って評価をしている様子を見ながら，画期的であるという感想を述べていた．

ｅ．問題点

２年目となったため，１年目ほどの問題点はなかった．クラス分けで入ったクラスのミスマッチと講師との関係，ステイ先の環境，飲酒については，渡航前のオリエンテーションで学生に話をし，渡航後もクラス分けのことや講師についての要望等をSCU Collegeに申し入れたため，特に問題にはならなかった．しかし，ステイ先での人間関係は避けることができない点である．今回，ホストマザーとはあまりうまくいかなかったが，ホストマザー以外のホストファミリーとはうまくコミュニケーションが取れた，という事例があった．話を聞いてみると，ホストマザーも過去に何人も日本人学生のホームステイを受け入れており，食事もきちんと作ってくれ，送り迎え等もしっかりとしてくれているが，言い方がきついなど，当該学生にとっては「合わない」人だったようである．学生本人の話も毎日聞きつつ，他の学生との会話も聞いてみると，「隣の芝は青い」という状況であった．この学生については，SCU Collegeの担当者とも話をし，担当者からホストマザーに話をしてもらい，歩み寄りをお願いした．ステイ先を変えずに２週間過ごすことができたが，最後まで不満はあったようである．文化の違いやミスコミュニケーションもある中で，徐々に慣れていくというのも，参加する学生にとっては貴重な経験であるので，今後，対応策についても検討し，できるだけステイ先を変えることなく，２週間学生にとって有意義な時間を過ごせるように対応をしていければと考えている．

Ⅴ．２年間の研修を振り返って

2017年度から始めた語学研修の目的を達成できているかどうかを振り返る．なお，本稿執筆以前に学生への紙媒体でのアンケート調査は行っていないため，学生からの感想は，筆者が直接聞いた内容を記載するにとどめる．

第１の目的である「英語を使ったコミュニケーション能力の向上を図る．」については，リスニング，スピーキング力は上がったと言える．また，積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする姿勢も養われ，参加者全員が英語で話すことに対しても物おじしなくなったことを実感して帰国している．ただし，この結果は，あくまでも学生の感想を基にしているので，今後は到着直後と終了時に同一のテストを実施するなどして，効果測定をしていく必要がある．

第２の目的である「英語圏での生活を通じ，異文化体験をすると同時に，日本の文化を振り返る機会を設ける．」については，参加学生の多くが，異文化に触れたことで，「海外にもっと目を向けていきたい」「日本とは生活習慣も違うし，大変

だったけど，行ってよかった」という感想を述べている．また，日頃，学生たち自身がとても便利で何でも手に入るような環境にいる一方で，オーストラリアではお店も夕方５：00には閉まってしまい，中には夜７：00や８：00に就寝する家庭で，日本との生活リズムの違いを体験し，自らの生活リズムと習慣を改めて考えた学生も存在した．

第３の目的である「他国の小学校，中学校の教育事情を学ぶ.」については，半日だけの見学であったため，雰囲気を知るだけにとどまった印象である．学生たちからも，「楽しかった」という感想は聞くが，教育事情そのものについては，2018年度の小学校の教室の様子以外はコメントを得られなかった．

2017年度がhigh school，2018年度が小学校及び併設の幼稚園と，滞在先が異なっていたが，今後の語学研修の際は，参加する学生が取得予定の教員免許状を考慮した上で，本学からSCU Collegeに要望を出していく必要があると考える．

Ⅵ．今後の課題

開始から２回実施している海外語学研修であるが，今後，より良いものにしていくためには，課題がある．先に述べたように，アンケート調査を実施していないため，学生から筆者が直接聞いた声を基に述べる．

１つ目は費用である．参加を希望していても，費用が約400,000円ということもあり，なかなか参加できないという声も多い．現在，SCUとの語学研修の協定を結ぶことを大学にも検討していただいている状況であり，この協定により，旅行会社を通さずに企画をすることで，少しでも安く研修を行うことができれば，参加者も増えてくると考えられる．

２つ目は単位認定である．他大学では，海外語学研修に参加することで，単位認定を行っていることが多い．参加した複数の学生からも「単位はもらえないのか？」という質問を受けた．参加するのであれば，少しでも学生に利益になれば，ということも検討し，2019年４月に開設した学校教育学科国際英語コースでは，海外語学研修の準備科目としてOverseas Study Ⅰを設定した．これを履修して２単位認定した上で，海外語学研修に参加することで２単位を認定するOverseas Study Ⅱという科目を設定し，事前事後指導の体制を整えた．この２つの科目は，学校教育学科の他の３コースも他コース履修をすることができ，単位認定も可能である．この科目は筆者が担当しているが，開講されたばかりであり，今後，内容も含め，毎年，検討を続けながらよりよいものにしていく必要がある．

３つ目はプログラムである．語学研修の内容も，基本的な英語表現の練習とオーストラリアの文化を扱ってきているが，前者については「中学校で習う英語みたい」という感想もあった．実際には中学校で習う内容を使って，うまく自己表現する機会が今まで学生にはなかったので，学んできたことを使えるようにする練習である．しかし，現地に入ってスムーズに研修ができ，より高度なことができるようにするには，先に述べたOverseas Study Ⅰの授業の中で，学んできたことをうまく使える練習をしっかりさせてから渡航させ，現地ではオーストラリアの文化，歴史，教育事情などを学べるように，SCU Collegeと連携を図りながら，プログラムを改善していく必要がある．

また，SCU College内での研修以外も，選択肢があると聞いており，他大学の学生がサーフィンに行ったことを聞き，本学のプログラムに入っていないことを残念がっている学生も存在した．今後，渡航する学生のニーズを考えながら，取捨選択していきたいと考えている．

４つ目はホームステイ先の選定である．オーストラリアの場合，ビジネスとなっていることもあって，「ビジネス」と割り切って受け入れている家庭は複数ある．そのため，受け入れ先の家庭環境も対応もさまざまである．SCU Collegeが提携しているホームステイ会社は，学生の性別や先方の家族構成なども考慮しているようであるが，全ての学生に当てはまるとは言い切れない．その結果が2017年度の男子学生の事例であった．ステイ先が決まるのは，渡航の１週間から10日前であるが，引率教員側でチェックを行った上で，必要に応じて事前変更なども行っていくと，ミスマッチは防げると考えられる．

５つ目は教員側である筆者の視点のみとなるが，到達度の確認である．2017年度は研修開始前のプレイスメントテストをした後，到達度は講師の裁量で評価されていたが，2018年度はリーディングテスト（短めの英文を読んで答えるもので，TOEICのリーディング形式に近い），リスニ

ングテスト（まとまった長さの英文を聴いた後で，質問に対する答えを選ぶ形式），英文エッセイライティングとPowerPointを使って２人一組でクラスメートの前で行うオーラルプレゼンテーションで評価をしていた．しかし，客観的な英語力を測るのであれば，類似のテストを行わないと，伸び率などを見ることができない．したがって，到達度確認についても，SCU Collegeに任せきりにするのではなく，本学の要望も伝えた上で，事前段階から連携を図り，場合によっては渡航前に事前テストを日本で行っておくなどの措置も検討していく必要がある．

今後，少しでも多くの学生に海外語学研修に参加してもらい，異文化に対する視野を広げるための手助けができればと考えている．

付記

本研究は，2017年度，2018年度の教育推進特別研究費「本学学生対象の海外研修制度開発」にて実施したものである．

参考文献

ベネッセ教育総合研究所（2006）．『第１回小学校英語に関する基本調査（保護者調査）報告書』https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/hogosya/pdf/data_07.pdf 2019年８月15日参照．

文部科学省（2008）．『小学校学習指導要領』

文部科学省（2008）．『中学校学習指導要領』

文部科学省（2009）．『高等学校学習指導要領』

文部科学省（2017）．『小学校学習指導要領』

文部科学省（2017）．『中学校学習指導要領』

文部科学省（2017）．「日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査（平成28年度）」http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/__icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1386753.pdf　2019年５月31日参照．

文部科学省（2018）．『高等学校学習指導要領』

太田昌志．（2015）．「第３章　学校外の学習機会」ベネッセ教育総合研究所（2015）．『「第５回学習基本調査」報告書［2015］』pp.113-124. https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=486 2019年８月15日参照．

寺沢拓敬（2016）．「小学校英語をめぐる保護者の態度の計量分析」KATE Journal, Vol. 30. 関東甲信越英語教育学会．